

「殿、ご乱心召されたか？」ではないけれど、このところ我ながら危ない。何がつてこのホームページはそもそもシャンソン・フランセーズの曲の心情を語るために始めたはず。ところがそれからカンツォーネ・ディタリアへ少し傾いたかと思ったら、最近はいっきりクラシカル・ミュージック。それというのもマドリガーレで「振られた男の心情」に接してから、急に「私の美しい人(Amarilli mia bella)」の中にある陶酔と苦悩に心を奪われ、四六時中頭の中で音楽が鳴り続ける始末。歌詞を口ずさんで覚えたと思ったら、いきなり紙に文字を綴り始めたのには超驚き。覚えようとして覚えたわけではないのに。それほどこの歌は心に染みこんだ。因みに私はこれから新年にかけてクラシックが主流。そうでなくても私の一年はクラシックで幕を開ける。

そこで、この秋...まだ秋のうちに少しは本来のシャンソン・フランセーズ用エッセイに立ち戻り「枯葉」について考えてみたいと思う。

「ああ、どんなに君に思い出してほしいことか」という切実なる願いの言葉で始まるジャック・プレヴェールとジョセフ・コスマ(ジョゼフ・コズマ)による『Les feuilles mortes(死んだ葉)=枯葉』は、別れた恋人を思って歌った歌。枯葉がシャベルで集められるように思い出も集められる。余談だがウイーンでは美しく黄金に舞う落葉を間口の大きなクリーナーで吸引する。ブイ〜と一瞬にして葉っぱが吸い込まれていく様子は見ていてかなり壮快。もちろん情緒はない。クリーンな街があるだけ。そこで昔のシャンソン「枯葉」の歌詞が生きる場所はシャベル。少しずつ枯葉が集められるように、思い出も少しずつ甦る。この「少しずつ」というのは案外つらい。一気にグワンとくればショックも大きいけれど意外にあっさりしているもの。じわじわ来るから辛さも強調される。じわじわ押し寄せる思い出に、しみじみと男が感慨に浸っているのに、無情にも北風がその思い出さえ運び去ってしまう。「さよ〜なら〜」と思いが離れていっても僕は〜と追いかけて、この愛を守っていくよ...それは言いすぎか。とかく女よりも男のほうがロマンティックである。もっとも去る方よりも取り残された方が傷は深い。そして残されても元気に復活する確率は女の方が高い。

さて、その『枯葉』を賛美して、その続編のように、あるいは同じ次元の違う場所で起こった別れのように異なる角度から歌にしたのがセルジュ・ゲンズブールの『枯葉に寄せて』だ。『枯葉』では北風が思い出を運び去ってしまうけれど、実はまた枯葉の季節が来れば同じように思い出し、再び北風が運び去るという繰り返しの中に「心のどこかで求めている甘美」が隠されていて「君への愛」そのものが凍結される。しかしゲンズブールの歌の方は「思い出したくないのに枯葉の季節が来るたびに思い出す」という対極的歌詞になっており、「愛の思い出を与えながら、それを奪い去った君」を忘れることが出来ない「行き場のない自分の愛」そのものが凍結される。いつになったら自分はこの愛から逃れられるのか? いったい「愛」という感情はどこからやって来て、どのように去っていくのかという「逃れられない苦悩」が隠されている。ここでも傷が深いのは男のほうである。何故かここで冒頭のマドリガーレとうまくつながるのだが、背中合わせの「愛の甘美と苦悩」は男の永遠のテーマなのだろうか。

「秋」という季節は明るい太陽が沈むのが早くなる。それはまるで恋の終わりを引き立たせるために「自然」という演出家が抜擢した名脇役のようでもある。(2012.10.15)